

抗逆流手術後の食道円柱上皮 (Barrett 上皮) の退縮

Regression of columnar esophageal (Barrett's) epithelium after anti-reflux surgery.: *D. L. Brand et al* (New Eng J Med 302: 844 ~848, 1980)

食道の円柱上皮 (Barrett 上皮) は胃-食道逆流に対する修復性または化生性の反応と考えられており、これに異形成 (dysplasia) や腺癌を生ずることがある。裂孔ヘルニア例で逆流の外科的治療 (Nissen または Hill 手術) を行った患者で術前の生検で円柱上皮が証明されているもの10例について、食道生検を行い、また食道内 pH 電極で逆流の状態を

検討した。これらの円柱上皮は、既に報告されたごとく組織学的に3型 (腸型, 中間型, 胃底腺型) に分類できることが確認された。

10例中4例 (Nissen 手術 2/7, Hill 手術2/3) では、術後5ないし11年間の follow-up で円柱上皮 (腸型2例, 胃底腺型1例, 3者混在1例) が退縮し、一部あるいはほぼ完全に重層扁平上皮にもどった。これらの症例は全例10代またはそれ以前に発症していた。うち2例では逆流が消失あるいは軽減していた。円柱上皮が消失しなかった5例 (全例腸型) では1例を除き逆流は不変または増悪していた。うち4例は25歳以後に発症したものであった。

これらの結果から、外科的治療に

より逆流が減少することによって円柱上皮は退縮すると考えられ、発症年齢が低い者ほど退縮が起りやすいと考えられる。一方、術後胸やけが消失し他覚的にも逆流が消失したにもかかわらず、円柱上皮が残存したものが1例あり、逆流以外の因子も円柱上皮の消長に関与していると考えられる。円柱上皮が術後消失しなかった別の1例 (腸型) では、4年後に円柱上皮の中に腺癌を生じた。抗逆流手術を成功させれば premalignant condition である食道の円柱上皮は消失する可能性がある。

(関東通信病院消化器内科

土谷春仁 抄)